

国際協力特別賞

私にできる貢献の形

岡山県立津山高等学校 2年

牧本 文佳

ホームステイの受け入れを通じて知り合ったフィリピン人の友人に会いにフィリピンを訪れたのは、私が小学6年生の夏だった。空港からホテルに向かうタクシーの車窓から見える景色に私の胸は高鳴っていた。信号待ちで車が停まった時、私の乗っている車の窓を叩く少年が現れた。とっさのことに何のことも理解できず、近づいてきた少年の顔を見ていた。彼は手に持った空き缶をこちらに差し出してきた。周りをよく見ると信号待ちをしている他の車にも、何人もの子供たちが同じようなことをしていた。子供たちは窓を開けてお金を入れることを要求していたのだ。私は困っている人を見かけたらいつも、何か自分にできる手助けをしてあげたいと思う。しかし、その時は、運転手も父も

「窓を開けてはいけないよ。」

と言った。信号が変わり、車は子供たちを残して動き始めた。

ホテルで現地の友人にその話をし、彼らがストリートチルドレンと呼ばれていることを知った。家が貧しいために、学校にも行けず、生活するために街に出てあのようなことをしているのだ。困っている人たちには違いないが、そのような境涯の人たちに私ができる手助けとは何であろうか。窓を開けて缶の中にお金を入れることではない。その日私が入れたかもしれない百円玉が、その子の暮らしを根本的に改善し得ないことは容易に想像できるからだ。

このことは、私の記憶に深く刻まれた。物乞いをする子供たちには何の罪もない。同じ時代を生きる同じ人間として、彼らにも自分たちと同じように安定した暮らしの中で学び、夢を持ち、それを叶える機会が与えられることが望ましいのは言うまでもない。私たちのように恵まれた環境で育ち、生活している者たちは、彼らのためにどんな支えとなれるのだろうか。

国際貢献を将来の夢の一つとして意識し始めた高2の春、修学旅行で訪れたマレーシアで、私は体調を崩し現地の病院を受診した。前日からの発熱と、明け方の嘔吐ですっかり減入っていた私に、一人のスタッフが声をかけてくれた。

「大変だったわね。」

予期しなかった日本語に、私は驚いた。その人は、クアラルンプールの病院で、日本人だけではなく様々な国からくる観光客などの患者を支援する専門スタッフだった。治療を受けながら、彼女の仕事ぶりから目を離せなかった。彼女は現地スタッフからも信頼され、その病院のスタッフの一員として輝いているように見えた。親身になって対応してくれたことに私自身が大きな安心感を与えられただけではなく、国際貢献のひとつのあり方を考えるきっかけを見つけた気がした。

日本で学んだ知識や、経験によって得られた技術を持って、海外で現地の人たちに混じって共に生きるという国際貢献もあるのではないだろうか。以前父から聞いたことがある。お金や施設を与えるだけの貢献は、一時の安心と喜びを与えることができても、持続的にその地域の人々の暮らしを改善する妨げになる場合もあり得ると。単に何かを与えるのではなく、支えを必要とする人たちと

共に働き、共に成長する社会貢献もあるのではないだろうか。私は、助けを必要とする海外の国で、子供の教育や貧困問題の改善に関わり、子供たちの未来を創る仕事に携わりたいと思うようになった。貢献の方法には様々なものがあるだろう。これから私が見聞きする全てのことが、私の夢に近付くための力になるに違いない。世界中の国が共に発展していける世界を作るために、様々なことに真剣に取り組んでいきたいと思う。